
ハイスクールD×D～恥痴龍帝 見参～

天笑

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D〜恥痴龍帝 見参〜

【Nコード】

N0115Y

【作者名】

天笑

【あらすじ】

兵藤一誠に憑依？転生？をしてしまった俺。

ちよいとばかし神……という名の変態から特典も貰った。
しょうがない。

頑張って生きていきますか〜。

※この作品はエロ5・ギャグ2・バトル2・シリアス？1の割合で提供します。

そして主人公最強、ハーレム、主人公無双、変態仮面は無敵、等々色々なカオスが含まれていますのでそれらが嫌な方は読まない方が良いでしょう。

神……だと？（前書き）

作者は勢いだけで書いてます。

ご都合主義やら適当な箇所がありますが、生暖かい目で見守って下されば嬉しいです。

それでは始まります。

クロスアウツ！

神……だと？

「気がついたか？ 若人よ？」

目の前の人物？ はそう言ってきた。

だが！！

俺はまた目を閉じた。

（うん。悪い夢だ。

うん。俺は何も見なかった。

うん。目が覚めればきつと輝かしい朝陽が俺の視界を照らしてくれる。

うん。間違いない。

うん。

俺の

視界に

ブリーフ二丁で

女性の下着を

被った

変態仮面なんて見なかったんだ!!!)

「残念ながら現実だ。若人よ。さあ股間（私）を見ろ!!（クイッ、クイッ）」

凄まじい悪寒を感じた俺は即座に意識を浮上させ、某エクソシストに出てくる奴もビックリな動きで後退した。
後退した時に「ウホッ!? イイ動き☆」なんて言葉は俺の耳には入って来ない!

「（クイッ、クイッ）」

「……………（ゴクリ。）」

俺は態勢を整えた後、奴と対峙する。

股間を突き出し腰を揺らす奴。

奴の顔面には女性の白の下着（リボン付き）がジャストフィットイング。

あえて言おう。

.....

.....

.....すごく.....変態です。

対峙して2時間経った。

変態仮面が現在の状況を教えてくれた。（腰を揺らしながら）

奴は神様らしい。

そして俺は死んだらしい。

まあ死んだ時の記憶がフラッシュバックしてきたから俺は死んだのだろう。

だが！

それより！！

何よりも！！！！

変態仮面が神様だということを！！！！！！

認めたくなかった！！！！！！

俺は認めたくなかった!!!!!!!!!!

大事な事なので2回言った。

話が進まないの、それは置いておこう。

まあ死んだ俺が何故変態仮面と対峙しているかというと

「転生……だと？」

「うむ。そうだ。（クイツ、クイ）」

「死んだら普通に転生するんじゃないか？違うのか？（ウプツ。気持ち悪ィ〜。」

「ああ、それはだな……カクカクシカジカ……だ。（ハアハア、あの蔑んだ視線と怯えたような視線が混ざった感じ……タ・マ・ラ・ナ・イ☆）」

変態仮面の言う事を纏めると

変態仮面が仕事中にミスをした。（ミスの内容は聞いたら嫌な予感がしたのでスルーしたぜ）

← そのせいで俺死んだ。

← お詫びに特殊な転生をプレゼントッフォーユー

← 現在に至る

らしい。

まあテンプレ……なら女神とか出てきて欲しかった……がそこは諦めよう。

「どんな世界に転生出来るんだ？」

「ふむ。私の管理する世界で「ハイスクールD×D」という世界だね。（クイツ、クイツ）」

「……………まあいいや。色々聞きたいけど、聞く気が失せる。」

ハイスクールD×Dね……………一歩間違えたら死亡フラグ一直線だな。

「で？特殊な転生ってのは？」

「何か力をプレゼンツしよう。」

「力……………ねえ。あんま思いつかんなあ。」

「そうかね？ふむ……………なら、キミが生前夢中になってプレイしていたゲームの力を幾つか上げよう。勿論、選んでくれて結構。それから全ての才能で限界突破付き。生前の経験、知識付き。他は……………」

変態仮面が次々と付けていく。

長々と付けていって所を俺はストップさせた。

余計な力を貰ったら死亡フラグ一直線だからな。

そして纏めると

- ・俺が選んだあのゲームの力を4個ぐらい。
- ・全才能限界突破

- ・ある程度？の肉体強化及び魔力・気力付与
- ・生前の知識・経験

ぐ
ら
い
か。
○

「むうう。まだ付けたりんが仕方ない。本人の希望だ。（まあ後付けしたらよいか）では、以上で構わないか？（クイツ、クイツ）」

「ああ、いい。だから早く転生させてくれ。……もう色々と限界だから……。」

「では、送る。ああ、そうだ。ちなみに原作破壊とかしてくれてもよいからな。（クイツ、クイ）

……何せキミは主人公に転生するんだから（クイクイツ、クイクイツ、クイクイツ、クイクイツ）」

変態の腰の動きが激しくなってきたと同時に俺の足元が光り始めた。
………って、何？

「おい！？ 今なんt.....は？」

足に何か………縄？

「では良き人生を！」

フオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオ！！！！！！」

変態仮面が叫び出したと同時に縄が上に引っ張られて……って!?

「まさかの逆バンジイイイーーーーー……………（キラ☆）」

こうして俺は転生した。

……………

……………

ハイスクールD×Dの主人公、兵藤一誠に。

……………どうしてこうなったorz

神……だと？（後書き）

目指せ

頂点！

変態のな！

主人公設定……かな（前書き）

相も変わらず適当な設定でごめんなさい

主人公設定……かな

兵藤一誠（転生ver）

変態仮面により転生？させられ兵藤一誠となった。

転生する時に変態仮面と遭遇してしまったので女体が恋しくなり若干？変態化した。

おっぱい超大好き。

おっぱい以外も大好き。

やる時はやってくれる男の子（色々な意味で）。

能力

1）スパロボOGSのアルトアイゼン・ヴァイスリッター・アンジュルグ・ソウルゲインの機体に換装できる能力

2）変態的な肉体能力と魔力

3）生前の知識や経験（原作知識含む）

4）全才能限界突破

5）???化

6）赤龍帝の籠手

1の機体換装能力については神滅具並みの力。

赤龍帝の籠手との併用で強化可能。※物語が進むにつれ新たな能力を載せていきます。

全て神（変態仮面）により魔改造化。
ただ機体色は全て赤。

2の肉体・魔力は変態仮面基準で付けてしまったのでかなり強し。

補足？

主人公の元いた世界はハイスクールD×Dの世界より上位の世界に位置している為、その上位世界である神（変態仮面）から付与された機体能力・変態的肉体能力・魔力等は特別なので悪魔の駒に影響しないし、この世界の者達に関知もされない。ただ自分の相棒となるドライグには後々機体換装能力に関して説明しようと主人公は思っている。

主人公設定……かな（後書き）

機体に関しては作者の好み。

アンジュルグ↓ヴァイサーガとソウルゲインに関してはおかしいだろ！というのは勘弁してください。
っていうか色々勘弁してくださいれば嬉しいです。

さて次は

キング・クリムゾンしていくぞ！

てへ☆

さあ、ぬこを愛でようではないか（前書き）

久々のD×D投稿。

待っていた方がいるかはわかりませんが、お待たせしました。

後、この作品のタイトルは現在（仮）です。

表記するのを忘れてました。

すいません。

しばらくはこれでいきますけどね。

とりあえず……早速原作ブレイクしてみよう。

どうぞ

さあ、ぬこを愛でようではないか

皆さんこんにちは。

兵藤一誠に転生してはや12年。

俺は現在小学6年生。

今日も未来に向けて頑張って体を鍛えています。
ただね

『相棒。今日は修行をしないのか?』

『あゝ……今日は体を休める日にしとく。そこそ強くなっただろうし。』

今の会話は頭の中? かな。

そんな感じで話してるんだけど……。

まあともかく原作同様に《赤龍帝の籠手》も付いてきてましたよ。
5歳ぐらいから体を少しずつ鍛え始め、8歳ぐらいの時に赤いドラゴンが何か夢に出てきたから、もしかしてと思い起きた時に心の中で『おゝい』と呼び掛けたら………反応したんだよね、ドライグが。
ドライグの方も何か驚いてたが。

驚いた後に我に返ったドライグは何か偉そうな口調で

「俺に気づくとは大した者だな。小僧。」

とか何とか言ってきたからイラッときた俺は思わず

「あ、悪い。今、エロ本見てるから後で。じゃっ。」

って言って、シャットアウトしちゃったんだ。

シャットアウトする時に「ちょっ、待て」とか聞こえたけど勿論、無視。

その後も何かずっと話し掛けてきてたけど勿論俺は無視。最後の方になってくると

「俺の話を聞いてくれ」(泣)。いや、聞いてくださーい(泣)。うおー(泣)。」

って泣いて懇願してきた。

あまりに哀れなドライブを見て俺は

「……………二天龍…ちょー笑えるんですけど(笑)。もうちょっと放置しよ♪」

勿論、無視しました。

その結果…泣き疲れたのか叫び疲れたのか何も言わなくなりました。

流石に可哀想になった俺は就寝前に精神統一の要領でドライブの所に行ってみようとしたら……………行けたよ。

やってみてビックリだったね、あれは。

まあ神様からチートっぽい肉体とか貰ってるから出来たのかね。

とりもまあドライブの近くに降り立つと…………グーグー寝てた。

再びイラッとききました。

人間イラッときたらやることは勿論

「寝てるんじゃねえよ!!この泣き虫トカゲエ!」

ドゴッ

ぶっ叩くよね、普通。

いや……流石にちょい叩いた手が痛かったけどさ。

ただドライグの方も結構効いたみたいで慌てて起きた。

ドライグを起こした俺はその後、色々と話した……のはいいんだけど殆どはドライグの質問だったけどな。

「どうやって此処までできた？」とか「さっきの衝撃はおまえか？」とか「精神世界とはいえ俺を殴ってちよつと痛いとか……人間かおまえ？」などなどだ。

まあそこらは割愛しよう。

とにかくドライグと意志疎通ができたから神器が発動セイクリッド・ギアできるかな～
と思い、試してみた。

……んだけど、何故か発動しなかったんだよね。

ドライグも驚きながら「こんな事は初めてだ。俺もわからん。」と言ってきた。

俺はまあどうでもいいかと思い、原作時期になったら発動できんだろと割り切った。

というか、発動できなくても生き残る術はあるしな。

そんなこんなでドライグとは魔法とかでよくある念話みたいな感じでよく会話をしている。

ただ……俺があまりにエロい事に若干呆れていたが。

仕方ないじゃん。

あんな変態を魂時に見たら女体が恋しくなるのは当然じゃん!?

だから俺は悪くない。

悪いとしたらあの変態仮面が悪い。

で、ドライグと意志疎通しながら身体をちよくちよく鍛えたりしてたんだよ。

今の俺、結構凄いと思う。

12歳の段階で……軽く石を握ると碎けます。

地面殴ると……陥没します……アスファルトが。

罅が入るとかじゃなく陥没ね。

反復横飛びをちょい真面目にすると……残像拳もどきが出来た……

これにはちよつと感動した。

……とにかく……うん、あの変態仮面やり過ぎだ。

まあ……いっか。

幸いな事に筋肉ムキムキじゃないから。

とにかく今の俺はこんな感じ。

で、話を戻して

ドライグと会話しながら俺は今学校帰り。

担任の美奈子先生（美人しかもナイスボディ、ここ重要）のプリプリのお尻とバインバインのオッパイを脳内再生しながら歩いていたら

「ニャーオ」

「お、猫だ。しかも真っ黒。……可愛いなあ。」

猫発見。

あまりの可愛さに俺は夢中です。

何やらドライグが言ってきたるが猫の愛らしさの前にした俺には釈迦に説法。

猫に向かってしゃがみ込み

「チツチツ、おいで。」

猫呼ぶ。

すると人慣れしてるのか

「ニャア〜♪」

ネコキタァー！

ちなみに俺は猫大好きです。

俺の手に擦りよる黒い猫。

かゝいゝなゝ♪

擦りよる猫の顎を搔いたり頭撫でたりしてた時に気づいた。

「あれ？こいつ怪我してら。……結構痛そうだぞ、これ。」

後ろの右足辺りに傷があった。

猫好きな俺は

「よっしゃ。おまえ、ちょっと俺んち来い。手当てしちやるから。」

と猫に話し掛けて抱き上げた。

暴れるかな〜と思ったけど、意外にすんなり抱かれた。
ほんとに人慣れしてんな、こいつ。

「ま、いいか。レッツゴー♪うは、ふかふかだ、こいつ。猫サイコ
オー。」

猫の抱き心地の良さに俺の気分は有頂天。

俺はそのままルンルン気分で帰宅した。

……この後……エラい事やってもうたと後悔する事も知らずに。

さあ、ぬこを愛でようではないか（後書き）

もし原作を知らない方がいるのなら

二天龍……ドラゴン族でもトップクラスの力の龍。

赤い龍……ドライグ。

白い龍……アルビオン。

この2匹の龍の力は神や魔王（この世界の）をも凌ぐといわれている。

はるか昔にこの2匹が大喧嘩して色々あつて神器に魂を封じ込められた。
セイクリッド・ギア

………だったかな。

セイクリッド・ギア

神器……神が造り出したもの。人間の身にしか宿らない規格外の力。

ロンギヌス

中には神滅具という強大な力を持つ神器もある。

ブーステッド・ギア

主人公が持っている赤龍帝の籠手もそれに当てはまる。

詳細はまた物語中に出てきます。

恐らく。

今の所はこんなところか。

というか、こんな説明いるのかどうかよくわかんない。

まあまた次回に。

主人公は頑張ります（前書き）

こんな感じで主人公は頑張ります。
どうぞ。

主人公は頑張ります

「……………」

「……………」

『相棒、どうした？』

ドライグが何か言ってきたが俺には返事をする余裕がない。
何故なら……………今、俺の目の前には理解したくない光景が広がっているから。

「どうした？ボーイ？そんな所に突っ立ってないで早く座りたまえ。
……………おっと、もしかして我輩の膝の上に座りたいのかい？なかなか積極的なボーイじゃないかあ……………濡れるぜ。」

……………黙れ、てめえ。

そう思ったが口には出さない。
言った瞬間に何やら理不尽な目……………いや恐ろしい目に合いそうだから。

ちなみに俺の目の前にいるクリーチャーの容姿……………」な感じのリーゼントっぽい感じの髪型をしている。

しかも黒い猫耳が生えている。

紫のレオタードっぽい服をピッチリ着込んでいる。

あそこがモツコリと隆起しています。

……………オエッ

某グラップラーの主人公並みにムキムキさらにテカテカしてます。

……………大胸筋動かすな、キモイ。

黒い薔薇を加えています。

……薔薇、頑張れ。

うつすらとピンクの口紅を付けてます。

……化粧品メーカーに謝れ、てめえ。

……ごめん、これ以上説明したくない。

不甲斐ない主人公ですいません。

とにかく一言で説明するなら

へ・ん・た・い!!

なんだ。

俺が転生直前にあった変態仮面並みの変態だ。

そんな変態が少し部屋を空けたら出現してベッドに寝そべりながら扉を開けた俺を見ていたんだ。

何を言ってるか理解できないって？

安心してくれ俺も全く理解していない。

理解しても理解したくないから理解できない。

「ボーイ？ どうした？ そんな立ち往生しないでとにかく座りなよ。
……それとも何だい？ 俺に《ピー》でもさせたいのかい？ ははは、
なかなかせっかちなボーイじゃないか。……だが嫌いじゃないぜ
え。」

ツツ!?

ヤバイ!

早く何か喋らないと……ヤられる!

「あんた!?! ……もしかして……いや認めたくないんだけど……
……一縷の希望を持って聞くけど……さっきの猫……か?」

あれから何度も変態猫又に色々尋ね返した結果………違っていた。
原作キャラのエロい猫又お姉さん《黒歌》さんじゃなかった。
本当に………ほんと〜に良かった。

もし事実なら………この世界を世紀末伝説のような世界にしてるところ
だったぜ………できないだろうけど。

とにかく落ち着いた俺は変態猫又に優しく教えて上げる事にした。

「よし………とりあえずあんた………帰れ。それと2度とくんな。俺の前に
現れていいのは美女・美少女onlyだ。変態は間に合ってるから。ついでに死んでくれ。」

『相棒………いつになく酷いな。』

いやいやドライグさん。

それでも優しく言ってる方ですから。

普通なら有無を言わず鉄拳滅殺モノですんで。

………何で頬を赤らめクネクネしてんだ、この変態猫又。

「うふおう………少年からの熱い蔑みの言葉を受けた我輩………思わず
勃ちまったぜえ（ウツトリ。ビンビンしてきた………見なよボォ
ーイ。」

変態猫又があそこを突き出してきやがった。

俺は思わず

「……………オエエエエーッ」

吐いた。

マジ吐きした。

考えてもみろ。

筋肉ムキムキの気色悪いオッサンがビンビンなアレをピッチリしたレオタード越しとはいえ見せつけてくるんだ。

俺の反応が普通だろう。

吐いた俺は悪くない。

ゲロ臭い部屋を掃除して換気してまた落ち着いた俺。
変態猫又も手伝ってくれたのにはちよつと驚いた。

で、変態猫又に何で人間形態で俺の前に出てきたのかを尋ねたら

「ボーイに仙術を教えてやろうかと思ってな。」

ってな事を言ってきた。

仙術……ねえ。

確かこの世界の仙術って“生命に流れる大元の力であるオーラ・チャクラというやつを重視して源流にしている点”………だったか。
魔法みたいな派手さはないけど生命の流れを操作する術で魔法を使う奴らからすれば対処法が限られてくるから仙術食らった奴は大抵死ぬ………だったな。

ふむ……学ぶのはいいんだけど確か俺の体って………

『なあドライグ。俺って……仙術使えんの？』

『わからん。相棒は……言っちゃ悪いが魔力が全く感じられん。生命力も並ぐらいしか無い………と思うんだが………』

『どした？いきなり黙り込んで』

『……おまえの数々の行動を思い返せば普通の人間じゃないのは嫌でも理解しているから仙術も覚えられるんじゃないか……とな。』

……何だコイツ。

まるで俺が人外みたいな発言をさらりと言いやがって……泣かすぞ、この赤トカゲ#

俺の静かな怒りを敏感に感じ取ったのかドライグが必死に弁解してきた。

『待て待て待て！？考えてもみろ！精神世界とはいえ二天龍である俺を魔力強化とかせずに素手で殴って「手……ちよつと痛い」で済む奴が普通な訳がないだろうが！？俺の方なんて結構痛いんだぞ。さらに言うならいつも不思議に思ってたんだがどうやって俺の元に来てるんだ！？まだ《セイクリッド・ギア》も発動してないのに！？』『……気合いじゃね？』理不尽だ！？相棒のチェンジを要求する！』『無理』うおくん（泣）、何でこんな理不尽の塊みたいな奴が今生の相棒なんだあゝ（泣）』

あらら……また泣き寝入りした。

原作と違ってこのドライグは泣き虫だな。

嘆かわしい。

まあいいか、後で殴るついでに慰めに行くか。

それより今は……

「オッサン……俺ってば仙術使えんのか？」

「我輩の見る目は確かだ。ボーイには何か不思議な感じがしてなあ

……ボーイなら極められると思っただけさ。」

……こいつ…俺の“力”に何となくだが気づいたのか。
ドライブですら気づかないのに……。

まあいいや、覚えれるなら覚えとくとするか。

「じゃあ教えて。俺、頑張る。ついでに格闘術とかもお願い。俺の名前は兵藤一誠。イツセーって皆は呼ぶ。」

「そうかい。わかったぜえ、イツセー。これからしばらく熱うい修行を共に励もうぜ……（ジュルリ）」

……早まったか俺（汗）。

とにかくいっちょ頑張って原作までにそれなりに強くなって死亡フラグを叩き折るとしよう。

……初めでも頑張って守るぞ!?

おまけ

「さてドライブ……楽しい楽しい八つ当たりタイム……もといサンドバッグタイムの始まりだ。」

「言い直した意味がない!?!クッ、舐めるなよ相棒!俺とて二天龍と謳われ神や魔王すら凌ぐと言われていたんだ。いつも殴られっ放しだと思っな!?!」

「ほっほう……ならどうするんだ？」

「こう……するんだあ（ガアアアッ）」

「赤龍帝のブレス……か。流石に強力だな……だが……」

ドガアアアアッ

「どうだ！？殺ったか？……なっ！？」

「……なかなか痛いじゃないかあ、ドライグさあん。思わず《換装》しちゃったじゃん。……つうか出来た事に俺もビックリだけど。」

「……何だそれ？……赤い鎧……か？」

「これか？これはアレだ。おまえをお仕置きするために生まれてきた装備……名は《ソウルゲイン》だ。本来は青い鎧なんだけど。」

「何だそれは！？俺をお仕置きするためって！？ちょっとおかしいだろ、それ……！」

「気にすんな☆些細な事だ。さて……お仕置きされる覚悟は万端か？こいつのラッシュは……ちとイタイぞ……（ニヤリ）」

「ま、まで……ちよつと待「逝くぜえ！？《白虎咬》！」ギヤアア
――」

う
う
う

主人公は頑張ります（後書き）

原作豆知識

黒歌について

原作では主人公・兵藤一誠のライバルである《白龍皇》側のエロい猫又お姉さん。
詳細はまた登場した時にでも。

ふう……主人公がまた強くなるなあ。

……原作どうしようかあ。

全く考えてない。

とりあえず……イツセーくんの貞操は無事ですからね。

後、ドライグ……頑張れ。

こんにちは原作（前書き）

今回……珍しくシリアス？な雰囲気だ。

上手く書けたなんて保証はございません。

それで良ければどうぞ。

こんにちは原作

はぁ〜い♪皆さん。

こんにちは〜。

俺は兵藤一誠。

この物語の主人公。

あれからもう何年も経ちましたよ。

今はもう高校二年生。

やりたい盛りの煩惱溢れる青少年さ☆

え？何？修行はどうしたって？

H A H A H A、そんなもんを聞いて何が楽しいのかわからないけど、簡単に教えてようか。

はい回想シーンどうぞ〜

「ボーイ。仙術ってのを大まかに説明するとだな「あ、大体知ってる。やり方をとりあえず教えて。後、股間を強調すんな。近寄るな。……そうかい。なかなか博識じゃないかあ。なら早速実践といこうか。」

「よろし……何故近づく？何故背後に回った？」

「なあに。ちょいと荒療治だがボーイに気を流し込み感じてもらうだけだ。襲わないさ。我輩はこう見えて紳士だからな。無理矢理は嫌いなさあ。……ジュリ」

「ぐっ……教えてもらおう身とはいえ何か嫌だ……襲ってきたら躊躇いなくぶっ飛ばすからな。」

「りょーかい。やるぞ。フンッ！」

「…………ツツツ!? この感じ……これが気……か。」

「やるじゃないかボーイ。一回でコツを掴むとはな。なかなか教え
がある。」

「…………ふむ。じゃあ次よろしく。」

「わかったぜえ。ボーイはタフだな。」

…………数ヶ月後…………

「おりゃっ!?!」

「まだ甘い! 気の練りが遅い!?! そんなんじゃあ我輩を満足させる
には程遠いわぁ!」

「お前を満足さすなんて誰がやるかぁ!?!」

…………更に月日が経ち…………

ドガッ

「グッ…………見事だ、イツセー。今の一撃…………我輩を超えたな……………」

「はあはあ……やった……ようやく……この変態に満足する一撃……食らわせた。……しんどかったあ。」

「ふっ……もう我輩が教える事はない。これからは技を磨き上げ強くなれ……イツセー。」

「応さ。……色々あんがとよ……九呂鹿。」

「ようやく名前を呼んでくれたな……まだボーイ……いやイツセーとはいたいが我輩も色々とやることがあるのでな口惜しいがこれで終わりだ。」

「……行くのか？」

「ああ……また縁があれば会えるだろう。その時には……イツセーの初物を何が何でも奪ってやるさあ。さらばだ！？（シュタッ）」

「はっ……俺の初めての相手はもう決まってるだよ。てめえなんかじゃやらねえ。……じゃあな。」

回想終わり

ってな感じである程度の仙術と格闘術を学んだのさ。
ちなみに強くなった俺を見てドライグが

『相棒が……強く……やめてくれ……俺に対する理不尽な八つ当たりが更に酷くなる……勘弁してくれえ（泣）。うおおくん（泣）』

だとさ。

H A H A H A、安心しろドライブ。

おまえに対する八つ当たりはちゃんと手加減するから。

何事も生かさず殺さずが基本なんだぜ☆

……あれ？俺ってこんなにSだったかな？

まあいいや、ドライブだし。

話を戻そう。

とにかく修行が終わり、日々を生きてきた俺。

最初に言った通り高校二年になってしばらくしたんだけど………来ないんだよね。

開始の幕を上げる彼女……天野夕麻改め堕天使レイナーレが。

原作では彼女が告白してきて俺がそれにOKしてちよつとの間恋人となった後に初デートして夕暮れ時の公園でロマンチックな雰囲気の中……殺される。んでからメインヒロインのリアスさんに助けられ悪魔として生まれ変わる……んだけど来ないんだよ。

あつれ〜？おかしいな〜。

ちゃんと駒王学園に入学して美女・美少女チェックしてメインヒロイン達がいるのを確認したから間違いないのに………何で？

しかもね〜、困った事にね………今、俺の目の前に金髪美少女シスターが右往左往してるんだよ。

ちなみに現在学校帰り。

彼女は原作のメインヒロインであるアーシア・アルジェントちゃんなんだよね。

まさか悪魔になる前に会うとはね………。

あ、転んだ。

………パンツをロックオン！………白………か。

グッジョブです！？

つと、それより助けないと

「大丈夫っすか？」

「《あうう、すみません。ありがとうございますう。》」

手を差し出しながら声を掛けた俺。

彼女が英語でお礼を言いながら俺の手を取る。

うん？何？悪魔に転生してないのに何で英語が理解できるかって？
んなもん前世の知識を活用してんだよ！？

自慢じゃないが前世じゃ俺はバリバリ英語喋れたさ！

中国語・ドイツ語・フランス語も完璧さ！

何故なら……個人的にその国の女性が好きだったからだ！！

ドイツはラウラちゃん、フランスはシャルルちゃん、中国は超鈴音ちゃん……1人作品が違うなんてのは気にすんな。

細かい事だ。

まあとにかく俺はその国の言葉なら喋れると理解してくれたらいいよ。

※作者は無理ですので会話の中に《》を入れさせてもらいます。転生させてからは通常に戻します。

俺はシスターの手を引いて立ち上がらせた。

すると彼女のヴェールみたいなのが風で飛ばされた。

「……………」

俺は見入った。

束ねていたと思われる金色の長髪がこぼれ、ストレートのブロンドが夕日に照らされキラキラと光る。

そしてグリーン色の綺麗な瞳。

引き込まれそうになった。

完っ璧！美少女。

しかもぴよこんと跳ねたアホ毛も完備。

パーフェクトウ！？

まさにパーフェクトウ！？

内心で素晴らしく感動して呆然としてたら

「《あのー…どうしたんですか？》」

訝しげな表情で俺の顔を覗き込んできたシスターちゃん。

……………駄目だよ、キミ。

そんな簡単に見知らぬ男の顔へ近づいちゃあ……………お持ち帰りしちゃうよ？

っと、そんな事より返事しないと

「《ゴメン、ゴメン。えっとキミは……………旅行……………じゃないか。》」

俺は彼女の横にあった鞆を見てそう尋ねてみた。

……………いや、違うのは知ってるんだけどね。

「《いえ、違うんです。実はこの町の教会に今日から赴任することとなりましたアーシア・アルジェントと申します。あなたもこの町の方ですか？》」

「《うん、当たり。俺の名前は兵藤一誠。イッセーと呼んでくれ。》」

「《そうですか！よろしくお願いしますね。》」

…………グハッ!?

アーシアちゃんのニコポが発動。

俺のハートに6215のダメージを食らわせた。

くっ!?

何だこの可愛い生き物は!?

原作イッセーが超可愛いと言っていたのも頷けるってなもんだ!!

…………原作ではこの子がレイナーレに殺されるんだよなあ……………
助けても問題ない…………かな?

そんな事を考えつつ俺はアーシアちゃんと会話をする。

彼女は道に迷ってしまい誰かに尋ねようにも言葉が通じなくて困っていたらしい。

俺は彼女を教会に案内…………する事にした。

いや、してしまった。

…………俺は最低だ。

彼女が教会に行けばどういう処遇を受けるのか知っているのに……………

変に原作を弄るとどうなるか解らなくなる事を俺は怖れたんだ。

本当に…………最低だ。

道案内をしようと歩き出した時

「うわああ〜ん!」

子供が転んで怪我をしていた。

アーシアちゃんがそれを見つけ慌てて近寄り

「《大丈夫? 男の子ならこのくらいのケガで泣いてはダメですよ。

》」

と言いながら擦りむいていた膝に手をかざし……………

ポワッ

怪我を直した。

セイクリッド・ギアである《聖母の微笑》トワイライト・ヒーリングだ。

どんな傷でも直してしまおう神器。

例え悪魔だろうが堕天使だろうが人間だろうが。

俺が呆然としている間に母親が子供をそそくさと連れ去っていった……アーシアちゃんに嫌な目を向けながら。

アーシアちゃんはその視線を受けながらも笑顔で手を振ってお別れをしていた。

子供の方も無邪気にお礼を言って去った。

……その笑顔はどこか寂しげだったのを俺は見逃さなかった。

俺は彼女に子供がお礼を言っていた事を教えた。

彼女はそれを聞き少し嬉しそうにした後

「《今の力……見ましたよね。あれは治癒の力……神様からいただいた素敵なものなんですよ。》」

俺にそうやってきた。

笑顔のままです。

俺は深く追及しないで

「《そうか。アーシアちゃんにはピッタリの力だな。アーシアちゃんは……優しいから……本当にお似合いの力……だな》」

「《優しいなんて!?!? そんな事はありませんよ!?!?》」

彼女は顔を赤らめながら謙遜した。

俺はそんな彼女を見て苦笑しながらそれを否定。

アーシアちゃんが優しくないなら世界中の奴らが優しくないと俺は

本気で思ったから。

俺とアーシアちゃんはお互いに否定しあう。

何か可笑しくなってきた俺達2人はプツと吹き出した後、大笑いをした。

ひとしきり落ち着いた後、アーシアちゃんを教会前まで案内。

現時点で悪魔じゃない俺は拒否反応は出なかったが……この教会から禍々しい気配だけは感じ取れた。

俺がそれを感じ取っている間にアーシアちゃんがここですと言いなから俺から離れた。

少し離れた後、彼女はくると振り向き

「《イツセーさん。今日はどうもありがとうございました。あのお礼がしたいんですけど》」

と言ってきた。

俺は思わず

「《いや！？いいよ、そんなの。ただ道案内をしたただけだし。俺はこれで帰るから。》」

そう返事をしてしまった。

アーシアちゃんは残念そうな表情をしつつ引き止めるのは悪いと思ったのだろう

「《そうですか。それでは次に会えたら必ずお礼をしますね。なの……またお会いしましょう！》」

笑顔でそう告げてきた。

眩しいな……。

彼女は本当に……優しくて良い子だ。

俺とは……全然違う。

俺は居たたまれなくなつてアーシアちゃんに別れを告げてその場を去った。

……アーシアちゃんは俺が見えなくなるまで手を振っていた……。

自宅に戻った俺はベッドで寝転びながらぼけっとしていた。
そんな俺が珍しいのかドライグが話しかけてきた。

『どうした相棒？ぼけっとして。お前らしくないな。いつもなら卑猥な本を呼んで興奮しているだろうに。』

……こいつは#

俺だって悩む時は悩むんだぞ、バーローが。

『別に。偶にはこんな事もあるさ。今日がそんな気分なだけ。』

『……そうか。』

ドライグはそれっきり黙ったまま。

……まあいいや。

ドライグを相手にする気分じゃないし。

思い出すのはアーシアちゃんの笑った顔。

次に寂しそうな横顔。

「……………ほんと…最低だな俺。」

ポツリと呟いた俺の言葉は妙に部屋に響いた。
俺はそのまま：眠りについた。

つづく

こんにちは原作（後書き）

一旦区切ります。

次回はアジア編の最終回。

強引な展開になります。

先に謝罪しておきます。

すいません。

では

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0115y/>

ハイスクールD×D～恥痴龍帝 見参～

2012年1月8日01時50分発行